幼児の教育
110年の散策

阪神淡路大震災関連の記事から（2）

前号に引き続き、一九九五年から二〇〇〇年にかけて断続的に連載された『震災後の子どもたち』の記事から見てみたい。
私は、自分の身近に、最愛の甥を含め幾人か、件の災害直後に生まれた子ども達や若者を知っている。
生まれる直前に胎内で阪神淡路大震災を経験した彼らは、早ければ来春にすでに大学生や社会人になる。今は幼い子どもたちも、あっという間に思春期になり大人になっていく。そういった目で見ると、二〇〇三年のこの時を生いている子どもたちがますます大きい。

以下、六甲学童保育所子どもクラブ指導員の森末哲朗氏による記事を見てみたい。
『震災後の子どもたち』と題する二十四回にわたる連載で、森末氏によるものが六回ある。
どうの回も捨て難いがここでは主に、森末氏五度目の登場となる「おとなと出会うということ」を見ていく。
障害者センターで働く古くからの友人が、日ごろ出会う若者の最近の傾向として、「おとなら言うら、さん、おとなと出会ってないね。」という指摘をする。それに答えている話として、
「おのど、さん、なんてわけでも、ある意味では最もおとなと出会うことが必要なんだ。その時期に、少年はカルーやリーフクラブのようなものだ。」「おのど、さん、意味を立てるだろう。」
「日ごろ、こんなことを、ある意味では最もおとなと出会うことが必要なんだ。その時期に、少年はカルーやリーフクラブのようなものだ。」「おのど、さん、意味を立てるだろう。」
「日ごろ、こんなことを、ある意味では最もおとなと出会うことが必要なんだ。その時期に、少年はカルーやリーフクラブのようなものだ。」「おのど、さん、意味を立てるだろう。」
「日ごろ、こんなことを、ある意味では最もおとなと出会うことが必要なんだ。その時期に、少年はカルーやリーフクラブのようなものだ。」「おのど、さん、意味を立てるだろう。」
「日ごろ、こんなことを、ある意味では最もおとなと出会うことが必要なんだ。その時期に、少年はカルーやリーフクラブのようなものだ。」「おのど、さん、意味を立てるだろう。」
「日ごろ、こんなことを、ある意味では最もおとなと出会うことが必要なんだ。その時期に、少年はカルーやリーフクラブのようなものだ。」「おのど、さん、意味を立てるだろう。」
「日ごろ、こんなことを、ある意味では最もおとなと出会うことが必要なんだ。その時期に、少年はカルーやリーフクラブのようなものだ。」「おのど、さん、意味を立てるだろう。」
仕事柄なのか、元々のクセなのか、高みに立って「考察」するだけでは気が済まない。ただ、もしかするとそのヒントにとはなるかなと思えることが、意外にとっては身近な自分の足元にあったのだ。

この夏、『中略』で、キャンペーンに出かけた。今年で十一回目。『中略』子どもは大いに自己主張をし、いさかいを起こし、自分とは異なる「他者」を発見して成長して欲しいことには変わりがない。そのためには、子どもたちが自分を磨くための「群れ」の存在がとても大きな意味をもっている。どんぐりには、二十四人の群れがあるのだ。

すでに十年ほどどんぐりクラブの取材を続けていた撮影グループがキャンペーンに同行、編集の村木さんが子どもたちへのインタビュー後に森末氏にこう言った。

「森末さん、このキャンペーンの中で一番おもしろいのはなに？という質問をしたら、まさひろ（六年生）はどう答えたと思います？」「なんやろ？」それがね、いろんなおとと会えること、彼は言ったんです。

七泊八日のキャンペーン全体が、一人一人の子どもを生活者として磨くための「教育装置」だというこのことの理解は持っていた。ところが、そのキャンペーンを支えるために参加するおとなの位置、子どもとの関係については、こういうことだと明言できる程の理解は持っていなかった。
なかった。子どもを中心にして、全日程を支えるためのサポートという捉え方をぼくは
いたようだ。

まさひろの答えを聞いて、「そうだ。子どもたちにとっては、個性豊かなおとなたちとの
出会いの場でもあるのだ」ということを、改めて肝に銘じた。

七泊八日の間に子どもたちが出会うおとなの数は、地元のスキー場の皆さんも含めると軽く
五十人は超える。子どもに厳しい人もあるし、甘い人もいる。こわいけれど頼りになる人も
いる。よく声をかけてくれる人もいれば、無口な人もいる。そうしたおとなたちの間をかい
ぐるりながら、「あのにおっちゃんはここまでなら許してくれる。むしろな人もいる。こわいけれど頼りになる人も
いる。よく声をかけてくれる人もいれば、無口な人もいる。そうしたおとなたちの間をかい
ぐるりながら、「あのにおっちゃんはここまでなら許してくれる。むしろな人もいる。それら
とは言え親と教師くらいではない子どもが増えてきている時代の中で、厚みのある
中でのおとの出会いは、とても大切なことを学ぶことのできる場でもあったのだ。

―震災後の子どもたち―のシリーズの残り5タイトルの他、第一巻第七号の「昼間のきょ
うだい」や「夜のきょうだい」も、どんぐりクラブで育ち合い、「育ち合いが子どもたちのことが書かれている。 Coloring the girl

―お茶の水女子大学―